



宗祇水かたはら走る浮輪の子
悼むとは鬼の辛さの夏大根
終戦日掘りかけの穴覗き見る
人間に不満を抱く金魚かな
三伏や羽音飛び交ふはけの道
台風の進路いきなり吾を向く
大滝の飢ゑたる音といふばかり
綿菅の日々新しき風攪む
土用芽の真つ赤地中の闇被き
銀河濃し烟りて父母を隠しけり
もの縫へば母へ繋がる晩夏光
滴りのジュラ紀の記憶確かむる
胃袋は泉のごとし雲の峰
鉄工所の地べた錆色夏深む
空蟬をつぶすに力こめにけり

*

小林貴子
円城寺 龍
宇田川典文
唐澤南海子
川村五子
眞榮城いさを
奥山源丘
久根美和子
丸山靖子
森 玲子
鎌田文子
長島 環
倉科繁登
内田愛子
西 遥

高慢な生者の空よ大花火
缶蹴つて女盛りの夏の性
庭入りといふ新盆の佛どち
締込みの干され祭の果てにけり
掌から掌へあきらめてゆく兜虫
死蛾網で掬ひて山の湯の明ける
日盛りを倦まぬ羽音の強きかな
捕虫網もて採れさうな軍用機
秋待てと犬たる自覚持つ迄に
草引けば地虫の夢の残りゐる
五十匹の鈴虫の音も一匹のごと
芋の糸繰る厨夜の更ける
日盛りを蜂が水滴運びゆく
夏期講習モデルの胸を板と視る
ありがとうわかるよと逝く夏の姉

今井愛子
瀬戸柚月
河野正子
田中優子
上村敦子
市川美八子
小伊藤美保子
佐藤 健
今野泰子
富山珠恵
斎藤幸子
早乙女 翠
坂本アサ子
小林さなえ
吉島節子

岳俳句・拓くことば 十月

(446)

宮坂 静生

けし粒ほどでよい、はっとした一粒の感動が一句のもとにあると句は強い。

金魚は人間に対してどう思っているか

人間に不満を抱く金魚かな 唐澤南海子

金魚鉢に飼われている金魚はどんな気持ちで人間に対してなのか。金魚は本心を見せないでいつもはなやかに振舞っている。案外、それは不満を持っているからではないか。私も金魚の気持ちを推測していたときに掲句に出会い、おもしろい推理だと思った。かつて金魚を描いた作家吉行淳之介ほどには、金魚を理解していないが。犬や猫でなく金魚がいい。

悼むとは鬼の辛さの夏大根 円城寺 龍

亡き人を悼む気持ちをたとえれば極上の辛味夏大根のごとしという。甘くはないが、生はんかの悼み、うやむやですごされてしまう追悼に対し、深く考えたもの。すると、飛び上るような夏大根の辛さが一番相応していると気付く。衝撃である。つねに身近なものをもって思いを深めていこうとする作者らしい喩えである。「鬼の辛さ」とのいゝ方に東北人らしい。

いう。鉄砲でも突き付けられたような表現に、さすがに驚いている感じが伝わる。島暮しの緊迫感本土に住む者にはわからないのかも知れない。

大滝の飢ゑたる音といふべかり 奥山 源丘

伊豆の浄蓮の滝のような大滝の音を「飢ゑたる音」とは想像外だ。なにに飢えているのか考えさせられる作。自然は満ち足りていないのかも知れない。つねに不安定で、満足していない。地震などはその不安定の最たるものか。人間社会の不安定に対して自然は安定しているものと見ているのであるが、自然も天変地異あり、不安定なんだと気付かせる。

今月の秀句

宗祇水かたはら走る浮輪の子 小林 貴子

郡上八幡は盆踊で名高いばかりではない。郡上の城主東常縁から連歌師宗祇が古今伝授を受けた地として知られ、その地の湧き水を名付け「宗祇水」という。その水が流れ落ち、吉田川から長良川へ至る。合流地点近くは地元の子どものための格好の水泳ぎ場。浮輪を抱えた子が宗祇水脇の坂道を駆け下る。囁目吟として郡上俳句大会での特選句。さりげない意外性があり、重厚な地名が浮輪の子で軽く生かされている。

い地貌を踏まえた見方が出されており、共鳴した。

終戦日掘りかけの穴覗き見る 宇田川典文

完結した思いではない。すべて中途半端。生きるとはそういうものだとの気持ちがあろう。終戦の八月十五日を迎えても同じ。路の傍らにある掘りかけの穴を、特別の感慨もなく覗く。日常のことだ。戦中の体験者は防空壕などの穴を連想するかも知れない。しかし、戦後生まれにとっては只の穴。地面が掘られていけば危いと思い覗くのはしぜん護身の反応だ。七十年ほど前の終戦日もだんだん遠くなる。生きるとはなんなのか、ふと立ち止まらせる句だ。

三伏や羽音飛び交ふはけの道 川村 五子

武蔵野の名残をとどめるしずかな崖の道。暑いさなかの三伏に、以下のような鳥類の盛んな活動を捉えたのが印象に残った。目立たないが自然の確かなたたずまいが伝わる。

台風の進路いきなり吾を向く 眞榮城いさを

宮古島在住の作者の台風時期の実感。今度は台風銀座でも無事かと予測していたところ、突然進路を変えて直撃すると

綿菅の日々新しき風掴む 久根美和子

湿原などの綿菅の穂絮が飛びはじめ頃の光景を詠っている。私の「わらび折るたび新しきわれなりし」に通う心であるが、自然の綿菅の穂絮の変化を風の動きに感じた点が微妙であり、確かな一つの見方である。深秋の移ろいが見える。

土用芽の真つ赤地中の闇被き 丸山 靖子

土用に芽が出る。その赤さが「地中の闇」が溢れ出たものとみたのが鋭い。暑いさなかだけに、闇も行き場を失い、一番弱い草木の芽に出口を見つけたものか。土用は自然の爛熟のとき。土用への関心は作者自身の成熟を思わせる。

銀河濃し烟りて父母を隠しけり 森 玲子

亡き父母は銀河系の中の星となっている。銀河自体は色濃く見えるが、ガスがかかって肝心の父母の星が見えないというのである。なぜ見えないのか。訝しい思いにとらわれながら、父母であっても、去る者は日々に疎しかと天地の真理を噛みしめている。

もの縫へば母へ繋がる晩夏光 鎌田 文子

心やさしい句。裁縫名人の母であったものか。こんな風にして母はつぎを当てていた。こんな浴衣を手縫いしてくれたと、「縫う」一点から母をしのぶとは感動する。地道な着眼

拓くことば ②① 自句寸言(5)「味噌たき」

葉桜に劇の装置の骨ばらす 昭和32年

「龍膽」(第八十八号・昭和三十二年五・六月号) 雑詠。「新樹の幹傷つけナイフの切れたためす」も同時の作。旧松高以来の講堂(現重文指定)のステージが演劇発表の舞台になった。「蛙昇天」(木下順二作)が上演された時であったか、劇の装置を講堂脇の通路でばらしていた。創って壊す。演劇好きの徒勞に似た行為に共感していた。花が終り葉桜も沈潜時期の感じ。劇という人間臭い架空のドラマがなぜ人を惹きつけるのか考えていた頃の作。句集『青胡桃』所収。

雪解 雫 山家の戸口釘多し 昭和33年

「龍膽」(第九十一号・昭和三十三年五・六月号) 雑詠。「東筑坂井村小川原君の家にて」と前書。後年に「炭焼きを教えてくれた友、小川原瑩」と前書して「炭焼の鏝」一文を学費とし(『噴井』)の回想句がある。小川原瑩君は、年齢は上であったが、高校の同期生。下りの篠ノ井線が冠着トンネルへ入る手前、姨捨山の麓に白菜やキャベツを作り、ボヤ炭を焼いて生計を立ててい

にご苦労した母のさまが思われる。晩夏の光も適切。

滴りのジュラ紀の記憶確かむる 長島 環

ジュラ紀は鳥類が出現し、イチヨウ、ソテツなど裸子植物が繁茂した時期。地質時代では中生代第二紀(一億七千万万―一億四千万年前)という。滴りはそんな昔から変わらないでポチンポチンとやっている。大昔の記憶を確かめるように。スケールが大きな句で、滴りを生きものとしてみたのが抜群にいい。新鮮。

胃袋は泉のごとし雲の峰 倉科 繁登

真夏にも食欲旺盛なご仁であろう。胃袋への泉の比喩とは大胆この上ない。泉とは清水がこんこんと噴き出る大地の源泉を指すものであれば、人間、こんな立派な胃袋を持つとは理想の姿。胃袋は消費社会の比喩と拡大解釈もできようが、こゝは人間に限っての比喩であろう。

鉄工所の地べた錆色夏深む 内田 愛子

ごく地味な着眼だ。鉄材の製造や出入がひんばんのところだけに、地面が錆色なのは当然。気付いても誰も句材にしない。それだけに作者の日常の詩情が深まっていることに気付く。

空蟬をつぶすに力こめにけり 西 遥

ささやかな空蟬くらいに、力をこめてつぶした。その代わりに自然の柔軟な内側へ繋がりたい作者の思いがわかる。大言壮語するよりも、この着眼に力がある。

生者の空という着眼は鋭い

高慢な生者の空よ大花火 今井 愛子

夏から秋にかけて、日本列島の各地で花火大会が目白押し。多量な火薬を消費し、もうもうと粉塵混りの煙を上げる。これでは大空が大丈夫なのかと心配になる。ちょっと見には空の変化はわからない。しかし、空には無数の傷がついているのではないか。人間は鈍感というずぶとさを持っている。それをよいことに生者は「高慢」になってしまった。瞬時の快楽のために、身近な自然にかぎりない負担をかけていることを忘れている。掲句は珍しい空への抗議の一句。大切に着眼、発見があるう。作者は花火大会で名高い長岡在住。

庭入りといふ新盆の佛どち 河野 正子

新盆の佛の魂がやって来ることを「庭入り」とははじめて出会ったことば。作者は高知在住なので、四国の御地ではそんない方をするものか。「庭」とはいろいろに用いられる。やさしい表現に佛への思いがこもり、佳吟と思う。

締込みの干され祭の果てにけり 田中 優子

た。貧学生の代表格。部落差別問題に関心を抱き『破戒』を研究していた。掲句は一度、三月に小川原家を訪ねた折の作。ぼちぼち雪解雫が落ちる戸口には、立春大吉から馬頭観音の札、やたら釘が打ち付けてあった。夕飯は魚も肉もない。出された茹白菜の甘味が忘れられない。重い蒲団に寝た。夜話に小川原家の祖母が私の父の実家稲荷山の「八百彦」へ、峠を越えて奉公に行った時の話をしてくれた。貴重な情報で忘れがたい。翌日、瑩君から残雪の四阿山でボヤ炭の焼き方を習った。生涯一度の体験である。句集『青胡桃』所収。

春夜梁の味噌玉笑ふ下行き来 昭和33年

「龍膽」(第九十一号) 特別作品「味噌たき」十句。後注に「味噌玉が編んだ縄から落ちさうになることを笑ふといふ」とある。母の実家南安曇郡堀金村での体験詠。毎年三月に味噌たきに行き、自家の分も分けて貰った。豆を煮る。味噌を練る。味噌玉をボール大にして味噌蔵の梁に吊る。「吊り味噌連ね小学校の朝礼よ」「吊り味噌の色づきつばめ軒汚す」は同時の作。加藤楸邨から「信濃の香り高い『青胡桃』拝誦しました。中でも「味噌焚き」の一連に深く心惹かれました。厚く御礼申し上げます」とはがきを頂戴したことがうれしかった。

祭相撲に出場した力士のふんどし、「締込み」が干されている。これで秋の村祭も了り。秋祭の一行事の相撲に目をつけ、その締込みを捉えるという俳句作りの着眼、発想の仕方が抜群にいい。真正面から秋祭を詠ってもなかなか独自さを出せるものではない。ところが、力の入れどころを脇へやって、相撲（秋）に着眼した。俳句への勘がいい。

掌から掌へあきらめてゆく兜虫 上村 敦子

子どもの手に握られた兜虫の哀れさを「あきらめてゆく」とすべてを天命に任せきった表現で、「行く末を暗示している。力ある虫の代表の兜虫だけに、どこか人間のいのちを思わせる。

死蛾網で掬ひて山の湯の明ける 市川美八子

山の露天風呂の朝の光景か。一夜にたくさんの蛾がとび込み、湯に浮んでいる。灯のもとで交尾して落下したものか、晩夏は残酷な季節でもある。体験の強みが一句に結晶した。

日盛りを倦まぬ羽音の強きかな 小伊藤美保子

炎天下、鳥か虫か「羽音の強き」に一つの発見がある。生存するものの精一杯生きるさまが当然のように捉えられているところがよい。格別の句材ではないが着眼はたしか。

捕虫網もて採れさうな軍用機 佐藤 健

日盛りを蜂が水滴運びゆく 坂本アサ子

気が付けば、日盛りにも水滴を抱えて運んでいる蜂がいる。日盛りといえば嫌な暑さと概括した見方をしがちであるが、昆虫の必死な生存を発見することで、日盛りの内味を知ることができ、教えられる。地味な着眼がよい。

夏期講習モデルの胸を板と視る 小林さなえ

モデルなので、当然出るところは出て、豊富な胸をしている。ところが外側からのそれだけに囚われていては個性的な絵にはならない。見つめると、ゆたかな胸も「板」と化す。

今月の秀句

缶蹴つて女盛りの夏の性 瀬戸 柚月

なぜ缶を蹴ったのか。どことなく相手欲しさの八つ当りのように読める。忿懣の捌け口がない。路傍に捨てられていた空缶を蹴った。缶くらい蹴っても自分の性がすつきりするはずがない。生理的な体から滲み出す空虚感をどうしたらいいものか。やり場のない鬱憤に、どこかへ体当りしたい。そんな壮年期にかかる女性の「性」を捉えた異色作。昔、鈴木しづ子という女流がいて消えてしまったが、作者は思慮深い。

基地を発ち、頭上すれすれのところを飛んでいる軍用機。捕虫網で採れそうとの無邪気ない方に、世の価値観をくつがえす一つの詩情がある。社会批判と見るよりも、遊びの視点から昆虫採集も軍用機も同一化したおかしさだ。

秋待てと犬たる自覚持つ迄に 今野 泰子

風変りな句であるが、犬の立場を尊重せよという。まともといえは俳人本来の見方がここにあるう。今は奔放な子犬であるが、秋くらいには犬の自覚も出てくるものと期待する。

草引けば地虫の夢の残りゐる 富山 珠恵

雑草と称して、人はやたら草を引く。しかし、草の根には地虫が巣くっている。地虫にすれば草を引かれれば夢が崩れたも同然。人間の恣意では計れない草と虫との默契があったもの。

五十匹の鈴虫の音も一匹のこと 斎藤 幸子

鈴虫五十匹の大合唱はまさに一つの大きな和音と化す。戸外から家内の鈴虫の音を聞いたときなど同感する。

芋の糸繰る厨夜の更ける 早乙女 翠

芋は野にある古来の繊維。弱いが、糸を紡いでプロが織ると上々の布になる。作者は妙高高原の地で、手芸のプロ。静かな晩秋の夜更けまで芋織に打ち込むさまが見える。

壁のようなもの。立ち足かかるのが一枚の板。構図を無機質的に、情感を入れないで捉えればそうなる。そこから今度は加えるものを加えていく。たし算をはじめめる。画家の工房を見せられたようでおもしろいと思う。

ありがとうわかるよと逝く夏の姉 吉島 節子

八十七歳の作者にとり、姉は高齢。それまでこんこんと眠っていたものか。最期に「姉さん、わかる？」と大声で呼びかけたところ、「ありがとう、わかるよ」と言い、逝った。それが命終のことばであった。これ以上の愛情表現はない。「夏の姉」とは気丈夫な姉の意。最高の別れであった。

次に岳集推薦候補作を掲げておく。

蚊遣とは優しき言葉昭和はや	有賀ふく江
土性つ骨試されてゐる炎暑かな	堀内ただを
今もなほ鉄の暴風沖縄忌	安田久太朗
初蟬や十五で逝きし子の未来	内田 愛子
明日は何処へ剽軽な夜店守	中澤 良子
己との闘ひ続く水馬	沖田 泰子
向日葵やびよんぴよん燥く乳母車	下崎 英子
鷺の声の闇夜這ひくる出穂期	比田井喜美子
サルビアの緋色の奥の哀れかな	白井小夜子